

3. 学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生スタッフが中心となり、ボランティアの第一歩となるような活動や啓発の場を提供しています。センターでは、日常的、定期的に行えるボランティアを数多く紹介、また、学生が社会の課題に気づけるようなイベントを実施して、ボランティアの裾野が広がることを目的として活動しています。

事業名	リユース傘貸し出しプロジェクト in 深草（継続企画11年目）
日時	2017年4月1日（土）～2018年3月30日（金）
場所	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
利用者数	延べ138名
企画メンバー （学生スタッフ）	永翁ふみな（文学4） 高野喜暉（経済4） 米山真奈美（経営4） 田中敬子（法学4） 大家彰文（国文4） 長田雄大（経済3） 山田真己（経済3） 江上春菜（経営3） 中野優太（文学2） 吉田 響（文学2） 小松舞由子（経済2） 丸山莉佳（経営2） 渡辺早耶（経営2） 安岐 萌（法学2） 石崎絵梨香（法学2） 奥田萌々（法学2） 山田京花（短大2） 吉田 樹（法学1） 佐々木大悟（政策1） 佐藤鴻河（政策1）

1. 経緯・目的

リユース傘貸し出しプロジェクトは、にわか雨など突然の雨が降った場合、傘を持ってくるのを忘れた学生や教職員に傘を貸し出す。学内で処分される傘を再利用することで、安易に使い捨ての傘を購入するなどの無駄を防ぐことが出来る。また、傘を貸し出す際に、ボランティア・NPO 活動センターの企画を周知することで知名度の向上も図る。

2. 概要

(1) 貸し出しまでの流れ

- ①センターに傘を借りに来た方に学生証を提示してもらい、学生に貸し出し用の傘の中から借りたい傘を選んでもらう。
- ②学生スタッフが傘の貸し出し表に日付、利用者の学籍番号、氏名、貸し出す傘の個体番号を記入する。
- ③返却が遅れた場合の為に、利用者に電話番号を貸し出し表に記入してもらう。
- ④学生スタッフが貸し出しの期日が一週間であることを伝え、その日までに返却するように説明する。

(2) 貸し出し用の傘について

当プロジェクトで使用する傘は学生部に届けられた落し物の傘である。持ち主が見つからないまま一定の期間保存され、引き取りの見込み

が無くなったものを提供していただいている。これらの傘に管理担当者が個体番号を記したテープを貼り、貸し出し用の傘としている。

(3) 期日を過ぎても傘の返却がない場合

一週間をすぎて返却されなかった場合は、利用者に連絡、三日以内に返却するように伝える。リユース傘を紛失した場合は代わりの傘を持参するよう伝える。※傘を盗まれた、不慮の事故により傘が壊れた等で返却が不可能となった場合は柔軟に対応する。

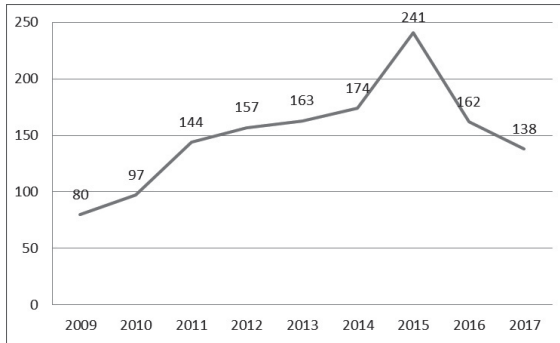
3. 広報方法とリユース傘貸し出しデータ

(1) 広報方法…広報方法については、立て看板を21号館下に設置、広報誌ボラゴンに記載、三角柱にも記載した。

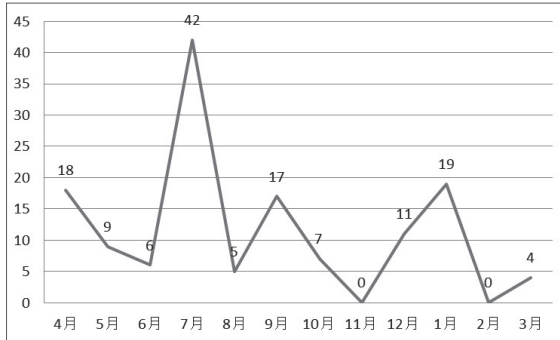
(2) リユース傘貸し出しデータ

2009年度（11月～3月）… 80名
2010年度（4月～3月）… 97名
2011年度（4月～3月）…144名
2012年度（4月～3月）…157名
2013年度（4月～3月）…163名
2014年度（4月～3月）…174名
2015年度（4月～3月）…241名
2016年度（4月～3月）…162名
2017年度（4月～3月）…138名

2009年度～2017年度の貸し出し本数



2017年度月別の貸し出し本数



4. 参加者の声・得られた効果など

- ・貸し出しの際にセンターやボランティア情報の広報を積極的に行った。
- ・雨が降った際に、センターまで来られない学生を対象に、「出張傘貸し出し」をやってみては、という意見があり、試しに7月28日急な雨が降ってきた際に、21号館1階のロビーで傘を持参し

て実施してみたところ、大変好評であった。

5. 学んだこと・今後の課題

リユース傘の広報活動は例年同様に、21号館前で立て看板を使って行っていた。また、「出張傘貸し出し」を試験的に実施したところ、持参した傘がすぐになくなってしまふほど好評だったので、来年度の活動として引き続き検討していきたい。学生スタッフの企画に参加した学生に積極的にリユース傘の紹介をするなど、広報活動は昨年度よりも多く行えたと思う。

傘の返却率は年間を通して93%で、ほとんどの傘は返却されている。センター外で貸し出した場合も、センターの場所をしっかりと伝えるよい機会になるのではないかと考えている。また、傘を借りに来る学生にとって、センターは傘を借りる場所だと勘違いされないように、センターの活動を時間をとって伝える工夫もしていきたい。地道な活動を通してセンターを訪れる人が増え、センターの認知度向上、学内のボランティア活動の活性化につながればと思う。

6. 経 費

なし

〈報告者：江上 春菜〉

事業名	Re-Use 傘プロジェクト in 瀬田（新規企画）
日時	2017年5月1日（月）～2018年3月30日（金）
場所	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
利用者数	延べ121名
企画メンバー（学生スタッフ）	石田進登（理工3） 多田裕貴（理工3） 加藤翔汰（農学3） 山元 樹（理工2） 乾佐枝子（社会2）

1. 経緯・目的

予期せぬ天候の乱れで傘がなく困っている方に対してボランティア・NPO 活動センター（瀬田）でリユース傘を貸し出す。使用するリユース傘は、学生部（瀬田）に一定時間保管された後に廃棄される傘を譲ってもらったものを活用する。傘の貸し出しをきっかけにボランティア情報やセンター事業を紹介して、センターに来てもらい、センターを知ってもらう機会とする。

2. 概 要

(1) 日時

ボランティア・NPO 活動センターの開室日時

(2) 対象

龍谷大学学生・教職員

(3) 広報方法

立て看板・広報紙に挟み込み・SNS など

(4) 傘の貸し出し手順

- ①傘を借りに来た方に、貸し出しファイルへ氏名、学籍番号または職員番号を書いてもらい、傘を選んでもらう。
- ②学生スタッフは、選んでもらった傘の個体番号を記入し、貸し出し期間は1週間である事を伝える。
- ③返却期間を過ぎた場合には、メールで連絡をし、返却を促す。

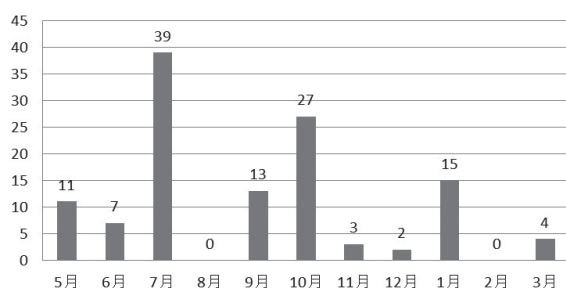
*貸し出しだけではなく、センター事業やボランティア等を紹介する。



3. リユース傘貸し出しデータ

総数121本

2017年度貸し出し本数



4. 学スタの声・得られた効果など

(1) 学生スタッフの声

傘の貸し出しをきっかけに、ボランティア・NPO 活動センターを知ってもらえる機会となった。廃棄される傘が使われるという点で環境にも良いと思った。

(2) 得られた効果

今までボランティア・NPO 活動センターの存在を知らなかった人も、リユース傘の貸し出しをきっかけに、センターがどんなことをしている所なのかを知ってもらえた。

ボランティア・NPO 活動センターについて知っている学生もなかなか入りにくいという声があったが、このプロジェクトがきっかけでセンターに入りやすくなった。食堂入口付近へのポスター掲示と、掲示板広報により、Re-Use 傘プロジェクトのPR ができた。

5. 学んだこと・今後の課題

1年目の企画ということもあり、学生スタッフへの周知が徹底しておらず、返却期限を過ぎた学生への対応が不十分だった。来年度は傘の管理方法についての工夫をしたい。また、傘を借りに来た学生に、傘の貸し出しだけの対応で終わる場合もたまに見受けられたので、センターの知名度向上と利用者増加につながるよう、来年度はセンター紹介をしっかりと行っていきたい。

今年度傘の破損が多かったなので、破損しないように注意を呼び掛けていきたい。

6. 経 費

消耗品

2,260円

〈報告者：多田 裕貴〉

事業名	2017年度深草広報誌「ボラゴン」の発行（継続企画9年目）
配布期間	2017年4月1日（土）～2018年3月30日（金）
場所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）学生スタッフ広報班
企画メンバー （学生スタッフ）	百済圭吾（経済4） 新川貴大（法学4） 石川真帆（法学4） 大矢誠志（法学4） 橋本望海（法学4） 南山裕紀（政策4） 伊藤万莉（経営3） 原 弘樹（経済3） 松坂智彰（政策3） 土橋茉奈（文学2） 平尾匡識（文学2） 脇坂弾夢（文学2） 米本圭吾（経済2） 坂井 綾（経営2） 寺島安里沙（経営2） 木村太翼（文学1） 荻原主基（経営1） 川村有希（政策1） 松田侑子（国際1） 岩本侑輝乃（短大1）

1. 経緯・目的

広報誌「ボラゴン」の発行を通して、本学学生にボランティア活動の啓発を行い、多くの学生がボランティアに興味を持つきっかけを作る。また、ボランティア・NPO 活動センターの周知を行い、センターの認知度向上を目指す。さらに、広報誌発行を通して、企画メンバーをはじめとする学生スタッフがボランティアに関する知識を深め、自分たちの活動をさらに理解するきっかけを作る。

2. 概要

- 年間3回、計2,500部発行
- 春号12ページ（1,500部発行）
 - ・センター紹介
 - ・学スタの1日
- 夏号12ページ（500部発行）
 - ・ボランティア入門講座
 - ・一般学生突撃インタビュー
 - ・特集「夏におすすめボランティア特集」
- 秋冬合併号 A3版（500部発行）
 - ・特集「ボランティア特集」

3. 得られた効果

- 本学学生
 - ・広報誌をきっかけとした来室者があるなど、学内におけるセンターの認知度向上が図れた。
- 学生スタッフ
 - ・記事から得た、ボランティア情報や体験談をコーディネートの時に活かすことができた。
- 企画メンバー
 - ・記事を作るためにボランティアに参加することでボランティアに対する知識を深め、記事作成を通じて学生スタッフの活動を深く知ることができた。

4. 学んだこと、今後の課題

○モチベーションの維持のためのPDCA

本企画は一年を通した活動のため、モチベーションを保つのが難しい。そこで製作過程を計画・実施・検証・改善の4段階（PDCA）に分けた。さらに企画・実施に関しては、企画・編集・校正に細分化することで活動を明確にして、モチベーションの維持を図ることができた。

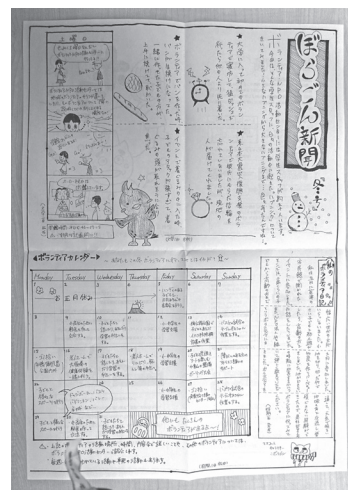


○読者のニーズを捉える

広報誌は読者のニーズに応じた情報を掲載することが重要である。しかしその読者のニーズを把握することが難しい。幅広い読者のニーズを把握することができる手法を検討する必要があると感じた。

○情報を多面的、多角的に収集、掲載する

広報誌を年に3、4回、製作していると、内容が重複してしまう。私たちの目指す「ボランティアの多様性」を伝えるのであれば、多面的、多角的に情報を収集し、掲載することが大切であると感じた。今後、そのための手法を検討していきたい。



5. 経 費

消耗品費

A4サイズ用紙	2,880円
A3サイズ用紙	500円
合計	3,380円

〈報告者：松坂 智彰〉



振り返りを行う企画メンバー

事業名	2017年度瀬田広報誌「Volunteer News」の発行（継続企画9年目）
配布期間	2017年4月3日（月）～2018年3月30日（金）
場 所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）学生スタッフ広報班広報誌係
企画メンバー （学生スタッフ）	清水謙汰（理工4） 佐久間涼（社会4） 長友沙樹（社会4） 福納知香（社会4） 仲上昂希（理工3） 瀧本真由（農学3） 杉村歩美（社会2） 玉田遼河（社会2） 藤野凌河（社会2） 永井沙季（理工1） 井上沙雪（社会1） 澤 優希（社会1） 田井拓暉（社会1） 村田大河（社会1） 横井川巧巳（農学1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）では、2009年度より、センターの活動や企画、また学生スタッフのボランティア体験を親しみやすく記事にし、学生スタッフの目線ならではの広報誌として発行している。

広報誌を配布することで、ボランティア・NPO 活動センターの本学学生や教職員への認知度を高めるとともに、当センターへの来室者の増加を目指し、ボランティア啓発を行うことを目的とする。

2. 概 要

(1) 春号（2,100部発行）

配布時期：4/3～4/6

内容：センター紹介、学生スタッフの紹介、学生スタッフの募集

(2) 夏号（600部発行）

配布時期：7/10～7/14

内容：センターの紹介、ボランティア紹介

(3) 秋号（600部発行）

配布時期：10/26,30,31

内容：ボランティア紹介、ボランティア体験談の紹介、ボラセンの本棚にある本の紹介

(4) 冬号（500部発行）

配布時期：1/9～1/11

内容：学生企画の紹介、ボランティア紹介、センターの紹介

(5) 配布・設置場所

学生スタッフによる手配り、ボラセン会議・説明会・報告会での配布、センター（瀬田）・学友会館パンフレットスタンド、V コーナーに配架

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・ 広報誌を見て、センターの存在を知り来室したという学生がいた。センターの来室やボランティアの参加につなげることができた。
- ・ 記事で、センター事業や学生企画、班や系の活動を紹介したことで、センターの活動や学生スタッフの活動に興味を持ってもらえた。

4. 学んだこと・今後の課題

- ・ 配る時期によって、予定の冊数を配りきることができた時期とそうではない時期があった。特に冬号は、冬休み明けすぐに配り始めたが、外に出ている人が少なく、配りきれなかった。このことから、時期によって枚数を変えたり、時期をずらして配るなど工夫をする必要がある。
- ・ ページごとに記事を書く担当を分担し、一人ひとりが記事を作成できるように工夫した。このことで、ページごとに担当者の個性を生



かした記事の内容が単調になるのを防ぐことができた。しかし、一方で字体やフォントの大きさなどのばらつきが出てしまい、見にくいといった意見があった。統一すべきところを決め、その上で個々人が自由に作成できるようにする必要がある。

5. 経 費

消耗品（A4用紙500枚 15束） 6,705円

〈報告者：玉田 遼河〉

事業名	Let's ボランティア ～ボランティアしようよ！～（継続企画8年目）
日時	春編：2017年 4月25日・26日・28日 昼休み（12時35分～13時25分） 夏編：2017年 7月 6日・ 7日 昼休み（12時35分～13時25分） 秋編：2017年10月16日・17日・20日 昼休み（12時35分～13時25分） 冬編：2017年12月 6日・ 7日 2限～4限（11時00分～16時50分）
場所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	来場・来室者 150名（春編：15名、夏編：80名、冬編：55名）
企画メンバー （学生スタッフ）	多田涼太（理工3） 松澤宏紀（理工3） 濱野瑛奈（社会3） 藤村一樹（社会3） 石田進登（理工2） 上村真衣（社会2） 樋上翔太（理工1） 頼田翔平（理工1） 石川秀凱（社会1） 奥村 遥（社会1） 木村卓真（社会1） 正中菜帆（社会1） 瀬戸山瑠衣（農学1）

1. 経緯・目的

「ボランティアには少し興味があるが、センターには行きにくい」と考える学生に対し、学生スタッフがセンターの外へ出て、ボランティアに参加するきっかけを提供し、多くの学生・教職員に興味をもってもらおうようにする。また、瀬田キャンパスの学生スタッフの「新しい啓発の方法を考え続ける」という目標に沿って各編で行う。

(1) 春編

人通りの多い場所にブースを設け、春に新しいことを挑戦したいと思っている新生や、自らの躍進のために己を見つめなおそうとしている在学生に、ボランティア・NPO 活動センター（以下、ボラセン）のセンター事業・学生企画へ参加促進、ボラセンの認知度向上を目的とする。

(2) 夏編

昨年度はボランティアを紹介するブースを設けていたが、今回はさらにペットボトルキャップ回収と七夕企画を同時に実施し、ボラセンに興味を持ってもらえるような啓発を行う。

キャップはプランターに再生され、エコ推進活動につながり、身近なボランティアの1つとして意識してもらえる。また、七夕という伝統的な日本の行事で季節感を味わってもらいながらボラセンの場所を知ってもらう。

(3) 秋編

ボラセンで気軽にできるボランティアとして「リキャップ活動・リユース傘貸出」の2つを啓発する。リキャップ活動はLet's ボランティア夏編に引き続き行い龍大生や教職員の分別意識の向上を図り、さらに、リユース傘貸出を同時に行うことでボラセン利用を促す。

(4) 冬編

昨年度は昼休みにボランティアを紹介するブースを設けていたが、2限～4限の間にブースを出して出張ボランティアコーディネートをを行う。また、冷える季節ということもありブースに足を運んでいただいた方に温かい飲み物を提供する。飲み物を飲みながらリラックスする雰囲気を作り、ボラセン利用とボランティア参加を促す。

2. 概 要

(1) 春編

日 時：4月25日（火）26日（水）、28日（金）

昼休み

場 所：2号館軒下

内 容：ブースを設営し、ボランティアチラシを複数枚設置して来場者にボランティア紹介をする。

来場者数：15名

(2) 夏編

日 時：7月6日（木）、7日（金）昼休み

場 所：ブース⇒食堂ステージ前、笹⇒センター前



内 容：春編と同様に、ブースを設営し学生スタッフおすすめの夏休みボランティア紹介を行った。そして、ボランティア紹介を聞いてくれた方、又はペットボトルキャップをブースにもってきてくれた方に短冊をプレゼントした。その短冊を付ける笹をセンター前に設置し、七夕の季節感を感じてもらおうと共にセンターの雰囲気を感じてもらおう。さらに、智光館地下ギャラリーでおすすめの夏休みボランティア特集とペットボトルキャップがどのように障がい者の就労支援となるかの過程をまとめて展示した。

来場者数：80名



(3) 秋編

日 時：10月16日（月）、17日（火）、20日（金）

昼休み

場 所：食堂ステージ前

内 容：「リキャップ活動・リユース傘貸出」と書いたチラシを挟み込んだポケットティッシュをセンター利用促進のために配布した。

配布数：602個

(4) 冬編

日 時：12月6日（水）、7日（木）2限～4限

場 所：ブース⇒食堂ステージ前、喫茶⇒センター内

内 容：春編、夏編と同様にブースを出し、ボランティア紹介を行った。また、ボラセンで温かい飲み物（コーヒー・ココア・紅茶・お茶）を提供した。チャートを作り、選んだ飲み物でオススメのボランティアを紹介した。また、コーヒー豆はフェアトレード商品のものを使い、フェアトレードの紹介も行った。同時にボランティア活動に関する意識調査のキャンパス内アンケートを実施した。

ブース来場者数：0名

センター来室者数：55名



3. 学生スタッフの声

(1) 春編

Let's ボランティア春編を通して多くの新入生が学生スタッフに興味を持ってくれた。

(2) 夏編

ペットボトルのキャップを分けて捨てることで障がい者の就労支援に繋がるので、今後は周りの友達に声掛けしたい。

(3) 秋編

ポケットティッシュだから配りやすかった。そして、もらってくれる人が多かった。

(4) 冬編

2日間での来室者数55名は学生スタッフになってから過去最高だと感じた。温かい飲み物を飲みながらだったので、学生スタッフもリラックスしてボランティアを紹介できた。

4. 得られた効果

(1) 春編

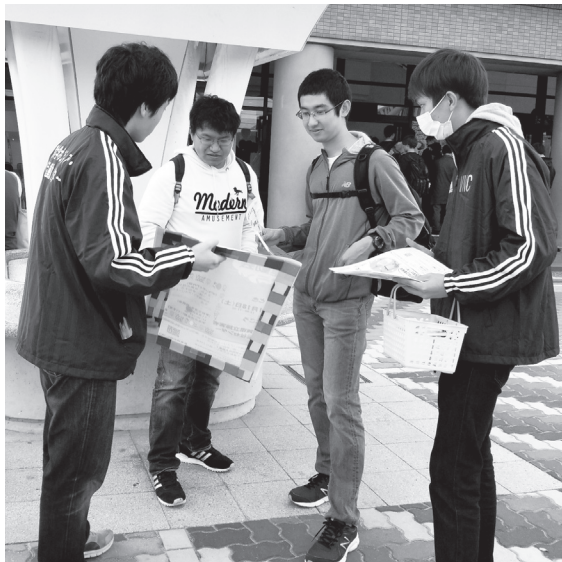
昨年度から実施しているクリアファイルの配布は、より多くの学生の来場に結びつき、結果的にセンターの周知につながった。

(2) 夏編

ペットボトルのキャップと本体を分別して捨てるという学生の分別意識が向上した。

(3) 秋編

突然の雨の日に傘を借りに来る学生が増え、傘の返却の際に学生企画やセンター事業の紹介ができた。



(4) 冬編

初めてボラセンに来室した学生にボラセンの雰囲気を感じてもらえ、また来てもらえるように声掛けができた。また、コーヒー豆やクリスマスカードなどを用意し学生スタッフが説明した

ので、フェアトレードに関心を持ってもらえた。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 春編

2号館と樹心館の間を歩く通行人は多いが、食堂前ステージより立ち止まってくれる人が少なかった。今後は、場所を検討する必要がある。

(2) 夏編

ブースへの呼びこみに対して苦手意識を感じている学生スタッフもあり、積極的に行える方法を考える必要がある。

(3) 秋編

ティッシュは、学生や職員の方にもらってもらえたが効果が見えにくかった。また、学生スタッフへの情報共有が遅れ、ML（メーリングリスト）でしか連絡してなかったのですべての学生スタッフに伝わらなかった。ティッシュ配りに挟み込むチラシを何らかの応募券にしてセンターへ足を運びやすくするなど、情報発信の仕方を考える。

(4) 冬編

秋編の振り返りを活かし、ML（メーリングリスト）とLINEでシフトを学生スタッフが共有したので、情報が正確に伝わった。今後も続けていきたい。

冬期はブースへの来場者が例年少ないので、外にブースを出さないことにした。喫茶の期間が2日間だったので、広報する期間が短くボラセン喫茶の周知が十分にできなかった。しかし、当日は予想以上の来室者があり、対応が行き届かなかった。今後もボラセン喫茶は続けていく予定なのでシフトに入る学生スタッフの数を増やしていきたい。

6. 経 費

消耗品	8,490円
-----	--------

〈報告者：石田 進登〉

事業名	アタックボラセン（新規企画）
日時	第1回目2017年 9月25日（月）～ 9月29日（金）昼休み 第2回目2017年12月11日（月）～12月15日（金）（第2、3、4講時）
場所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	学内でのアタックボラセン対象者 第1回目… 22名 第2回目…284名
企画メンバー （学生スタッフ）	田ノ上優光（文学4） 百濟圭吾（経済4） 津田莉沙（経済4） 馬庭颯斗（経済4） 春名亮佑（経済4） 新川貴大（法学4） 石川真帆（法学4） 大矢誠志（法学4） 橋本望海（法学4） 南山裕紀（政策4） 梅村愛香（国文4） 坪下大介（文学3） 鴻池 遼（経済3） 原 弘樹（経済3） 伊藤万莉（経営3） 日野萌絵子（法学3） 乗矢隆良（政策3） 松坂智彰（政策3） 土橋茉奈（文学2） 平尾匡識（文学2） 村井俊介（文学2） 脇坂弾夢（文学2） 清水理沙（経済2） 米本圭吾（経済2） 大丸千佳（経営2） 坂井 綾（経営2） 寺島安里沙（経営2） 宇賀神健太（法学2） 火威沙耶（法学2） 湯川 希（法学2） 織田香朱美（政策2） 島内桃花（政策2） 杉本理沙（政策2） 木村太翼（文学1） 中川寛喜（経済1） 萩原主基（経営1） 松岡俊希（法学1） 川村有希（政策1） 山田優成（政策1） 深澤真吾（国際1） 松田侑子（国際1） 岩本侑輝乃（短大1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（以下、ボラセン）を知ってもらう手段として、チラシ配り、立て看板の設置、SNSの配信などを実施している。これらの取り組みによって一定の成果が出てきているが、従来行ってきた広報手段は一方的にメッセージを伝えるだけで、ボランティアに関心のある龍大生や教職員の方々に對してボラセンの活用方法を知ってもらうには、アプローチが弱いのではないかと考えた。

この企画では学生へのアプローチ強化の為に、学生スタッフが構内で実際にコーディネートとボラセンの広報を行う。それによって、一方的にメッセージを発信するだけではなく、龍大生や教職員の方々とコミュニケーションを取りながらボラセンの活用方法と場所を知ってもらい、利用者拡大につなげる。この企画を実施することにより、2つの目的を達成し、ボラセンの活性化へと繋げる。

【企画の目的】

(1) ボラセンの認知度向上

センターから出て構内でコーディネートすることで龍大生や教職員の方々にボランティアに参加するきっかけを作る。センターの場所と活用方法をより多くの人に知ってもらう。

(2) ボラセンの活性化

学生スタッフは今回の学生へのコーディネー

トを通じてコーディネーション力向上を図る。この企画を主体となって企画運営しているコーディネート班と広報班で新しい取り組みを行うことで班活動並びに、ボラセンの活性化を図る。

2. 概要

(1) 日時：

第1回目…9月25～29日（お昼休み）
第2回目…12月11～15日（第2、3、4講時）

(2) 場所：龍谷大学深草キャンパス内

第1回目…キャンパス内、7号館前のウッドデッキにブース設営
第2回目…22号館食堂

(3) 内容：龍大生及び教職員に向けてボランティアのコーディネートを行うと共に、ボランティア・NPO 活動センターの広報を行う。手持ち看板、広報誌、ちらしなどを持って学内で声をかけ、コーディネートする。

(4) 広報：チラシ、SNS など

(5) 参加対象：龍大生及び、教職員

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 第1回目

- ・ボランティア紹介を通じてボランティアの知識をつけることが出来た。
- ・短いお昼休みの間であったため、時間に余裕

がある方が少なかった。

- ・同じ人に違う学生スタッフが何度も声をかけてしまうことがあった。
- ・ブースまでの距離が遠く、そこまで行ってもらうことが難しかった。

(2) 第2回目

- ・1回目のお昼休みに比べて時間に余裕があり、声をかけやすく、答えてくれる人が多かった。
- ・たくさんの学生と対面し、アンケートをすることでボランティアのニーズを知ることが出来た。
- ・時間がない人にはボラゴンを配ることでセンターの広報をするという方法をとった。
- ・たくさんの学生に対してボランティア紹介をすることでコーディネーションに対しての自信がついた。
- ・食事後に座っている学生は話を聞いてくれやすい。
- ・普段のシフトでボランティア紹介をした学生スタッフが少なかったため、今回一般学生に対してボランティアを紹介出来たことがコデ力向上につながり良い経験になった。
- ・アタックボラセンを行う中で、センター事業や、学生企画の広報を行うことが出来た。

4. 反省点

(1) 第1回目

第1回目のアタックボラセンは、お昼休みに行った。お昼休みだと、時間に余裕のある方が少なく、少し離れたブースまで誘導するのが難しいことが多かった。紹介するボランティアの中に、かなり先の日程のボランティアがあったため、紹介のみで終わってしまったり、対象者に興味のあるボランティアがあったとしても時間がなく、じっくりと紹介することが出来なかったのが残念だった。

(2) 第2回目

第2回目のアタックボラセンは、2、3、4講時に行った。学生が時間を過ごすことの多い食堂で行ったため、食事の学生が多く、声をかけづらい場面が多々あった。ボランティアに興味がある人となない人が同じグループでいた場合、臨機応変な対応が必要で、作成していたマニュアルでカバーできない部分があった。第1回目同様じっくりとボランティアを紹介することが出来なかったなどがあげられる。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

第1回目の課題である、時間が少ない、ブースまでの距離が離れているという課題が出てきたので、第2回目は、第2、3、4講時にシフト単位で行ってもらい、移動式のブースに変えることでその場でボランティアコーディネートをを行うことができるようにやり方を変更した。お昼休みに比べ比較的時間の余裕があり第2回目は284名にセンターの広報を行うことができ、その内121名に具体的なボランティアを紹介することが出来た。

アタックボラセンを行うことによって、センターの広報及び、ボランティアをコーディネートする機会が増えたことにより「センターの認知度向上」と、「ボラセンの活性化」につなげることが出来たと考えられる。

(2) 今後の課題

今後の課題として、更なるボランティア活動者の増加及びセンターの認知度向上があげられる。2回のアタックボラセンを行っていく中で、ボランティアに興味のある学生及び教職員の方々をターゲットに絞って企画を実施してきたが、ボランティアに興味を持たない学生及び教職員の方々に対してアプローチをかけていくことが、ボランティア人口の増加及びセンターの認知度向上につながるのではないかと考える。その為には、ボランティアに興味を持たない人でも、興味を持ってもらえる工夫を今後考えていくことを今後の課題としてあげる。

6. 経 費

A4サイズ用紙500枚 240円

〈報告者：松坂 智彰〉



事業名	第95回龍谷祭への出展（深草）（継続企画16年目）
日時	2017年11月3日（金）～11月5日（日）
場所	深草キャンパス展示：22号館107教室 模擬店：芝生前広場
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
来場者人数	展示：1日目249名 2日目261名 3日目181名 合計691名 模擬店：販売数735食
企画メンバー （学生スタッフ）	藤岡 舞（経済4） 南山裕紀（政策4） 延安美菜（文学3） 藤原 純（文学3） 伊藤万莉（経営3） 江上春菜（経営3） 辻 祐児（法学3） 日野萌絵子（法学3） 乗矢隆良（政策3） 玉川隆明（文学2） 土橋茉奈（文学2） 中野優太（文学2） 平尾匡識（文学2） 村井俊介（文学2） 藪辻裕美（文学2） 吉田 響（文学2） 小松舞由子（経済2） 大丸千佳（経営2） 坂井 綾（経営2） 寺島安里沙（経営2） 丸山莉佳（経営2） 渡辺早耶（経営2） 織田香朱美（政策2） 島内桃花（政策2） 杉本理沙（政策2） 辻奈都乃（政策2） 富上弥生（政策2） 下岡祥人（短大2） 山田京花（短大2） 木村太翼（文学1） 中川寛喜（経済1） 吉田 樹（法学1） 大嶋優作（政策1） 川村有希（政策1） 佐々木大悟（政策1） 佐藤鴻河（政策1） 武村祐資（政策1） 樋口大輝（政策1） 松田侑子（国際1）

1. 経緯・目的

〈展示〉

毎年、ボランティア・NPO 活動センターでは、龍谷祭で主に学生向けの展示を行ってきた。しかし、昨年の来場者アンケートの結果によると学生よりも一般の方が多いという傾向が見られた。また、私たちは活動の中でボランティアがなぜ必要とされるかを考え、学ぶ機会が多くあった。それらを踏まえ、今回の展示では以下の2点を重視する。

- ・誰にでもボランティアは身近であり気軽に参加できることを知るきっかけにする。
- ・ボランティア活動が生まれた背景を知ってもらう。

さらに、龍谷祭で学生スタッフが一丸となって取り組むことによって、学生スタッフのボランティアに対する知識や社会課題への興味関心を深め、理解する機会を作り、今後の活動に活かしていきたいと考えている。

〈模擬店〉

模擬店を出店することにより、ボランティア・NPO 活動センターの認知度を上げる。収益は「はみんぐ Bird」への寄付と、これからの活動費に充てる。

〈はみんぐ Bird とは〉

四年前から継続して売り上げの一部を寄付している団体で、この団体を通して、福島との繋がりを維持し、東日本大震災を忘れないという思いからこの団体に寄付することを決定した。「はみんぐ Bird」に支援を続けたいという思い

から今年度も寄付させていただくことにした。

2. 概要

〈展示〉

- ①ボランティア活動の紹介やボランティア活動の背景などを展示した。また、実際にボランティアに参加した人の生の声や、写真を使って展示した。
- ②アンケートを実施。アンケートブースに交流スペースを設け、来場者へアンケートを呼び掛けながら、ボランティアも紹介した。

〈模擬店〉

1食200円でオムそばを販売し、その利益を寄付とセンター活動費に充てる。笑顔で活気のある販売を行うことを目標とした。

3. 参加者の声・得られた効果など

〈展示〉

来場者：3日 249名 4日 261名 5日 181名
合計来場者数691名

【来場者の声アンケートより抜粋】

- ・昨年、大変わかりやすい説明をして頂いたのが今年もぜひ来たいと思っていました。説明がわかりやすく熱意が伝わってきました。来年また来ます。
- ・ボランティアにこんなにも幅広い活動があると知らなかった。自分も今後ボランティアをやってみようと思った。
- ・空間が明るくて素敵でした。中央スペースが広く、後から戻りやすい配置で良かった。

4. 反省点

〈展示〉

(1) 準備段階

準備の段階で企画メンバー以外の学生スタッフが関われる雰囲気を作れなかった。

(2) 当日

- ・来場者数の想定を昨年度と同様に考えていた。昨年までは初日が平日だったが、今年は祝日だったため、予想以上に初日の来場者数が多かったため混乱が起こった。臨機応変に対応できるだろうと甘く考えていた部分もあったので、もう少し現実的にシュミレーションして具体的に対応策を考えておくべきだった。
- ・他のボランティア系のサークルと同じ団体だと誤解する方が多くいた。ボランティア・NPO 活動センターについての説明を手短に的確にする必要があった。
- ・準備段階と同様、企画メンバー以外の学生スタッフを当日も巻き込めなかったと思う。
- ・シフトの入れ替わりがスムーズにできなかった。

〈模擬店〉

- ・今までの模擬店メニューに比べて、調理に時間がかかった。
- ・売上予測を誤り、材料を一部買いすぎた。
- ・情報共有のやり方に問題があり、企画メンバーで情報把握の偏りがあった。また、企画メンバー内でも話し合う機会が少なかったため意見交換が出来ず、一部の人で物事を決めてしまうことがあった。

5. 学んだこと・今後の課題

〈展示〉

- ・昨年は模擬店の企画メンバーが展示のシフトにも入っており、模擬店メンバーの負担が大きいのと考え、今年は当日のシフトに模擬店メンバーを入れないという体制をとってみた。しかし、やはり学生スタッフ全員が一緒になって関われるような体制が望ましいと思った。
- ・最初に2回生をリーダーとして動きだし、次に段階的に1回生に責任を分担することによって、それぞれが責任と自覚を持つことができた。

- ・児童館での学生企画で実際に使用したペットボトルボーリングを体験コーナーに設置し、子どもたちが自由に使えるようにしたところ、大変好評であった。今後も体験コーナーを継続していきたい。今までにない展示方法や来場者になじみの少ないボランティアを取り上げるなど、新しい試みを検討していきたい。

〈模擬店〉

- ・小さな声掛け、心配りなど些細なことを大切にすることで、企画メンバー間の一体感を感じることができた。一人ひとりが責任を持って、自分の力を発揮し行動していることを感じることができ、うれしかった。
- ・企画を進めていく上で、仲間同士の雰囲気作りが大切だと実感した。
- ・今後企画を進めていく際、今回学んだことを意識して活動していきたい。

6. 経 費

〈展示〉

消耗品費 9,823円

〈模擬店〉

総売上げ	147,000円
経費 材料費	45,000円
冷蔵庫費	4,000円
検便費	4,000円
利益	94,000円

寄付先：はみんぐバードへ10,000円を寄付。
残額は学生スタッフの活動費に充てる。

〈報告者：(展示) 下岡 祥人
(模擬店) 中野 優太〉



事業名	第95回龍谷祭への出展（瀬田）（継続企画15年目） ゼロから始めるボランティア ～下から見るか？横から見るか？～
日時	2017年10月28日（土）〈展示〉 10時00分～17時00分 〈模擬店〉 10時30分～16時00分 2017年10月29日（日）〈展示〉 10時00分～12時00分 〈模擬店〉 10時30分～12時00分 ※29日は台風の影響で予定時間より短縮
場所	瀬田キャンパス2号館多機能教室1、2（展示）／2号館付近（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	来場者数（展示）93名（1日目83名・2日目10名）
企画メンバー （学生スタッフ）	曾根竜也（社会2） 美濃優磨（社会2） 橋本昌尚（農学2） 中川和謙（理工1） 二木亮英（社会1） 瀬戸山瑠衣（農学1）

1. 趣旨・目的

- (1) 龍谷祭では多くの学生や地域住民が来場するので、ボランティア・NPO 活動センターの広報をする良い機会である。そこで、多くの人にセンターの存在や活動を知ってもらう。
- (2) 来場者がボランティアに興味や関心を抱き、ボランティアの魅力を感じてもらえるような多様な啓発を行う。
- (3) 龍谷祭に向けて展示製作や模擬店の運営を進めることで学生スタッフ自身がボランティアやセンターへの理解を深めると共に、全員で協力して組織力・団結力の向上を目指す。



2. 概要

(1) 展示

場 所：2号館多機能教室1,2

- 内 容：①ボランティア・NPO 活動センターの活動紹介
- ・センターの役割について
 - ・学生スタッフとは
 - ・企画（大津祭、コミュニティ）、班、係紹介等
 - ・登録サークルの紹介

- ・Facebook、Twitter、メールマガジンの紹介
 - ・リユース傘貸し出しの紹介
 - ・パネル展示（写真で見るボラセンの活動）
- ②ボランティアの多様性を伝えられる展示
- ・学生スタッフが体験した夏休みボランティア
 - ・気軽にできる様々なボランティア紹介（献血、ヘアドネーション）等
- ③復興支援について知る展示
- ・東日本大震災復興支援ボランティア（発災から現在までの活動）
 - ・映像で見る東日本大震災復興支援活動
 - ・熊本地震復興支援ボランティア（2016）
- ④スタディツアー
- ・国内体験学習プログラム
 - ・海外体験学習プログラム
 - ・NGO スタディツアー合同説明会
- ⑤体験、参加型の展示
- ・Re キャップ活動の紹介とキャップアート
 - ・ポストイット（ボランティアに行くことで何を得られるか）等
- ⑥ボランティアコーディネートコーナー
- (2) 模擬店
- 場 所：2号館付近

内 容：揚げたい焼き

価 格：2個入り200円

個 数：2日で400食（2個入り）

売上金：68,200円

収 益：31,370円

利益の使途：学生スタッフの今後の活動に使えるものを購入（ボラセンの緑化、クリップボード、ミニホワイトボード等）

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・ボランティアが様々な場所で必要とされていること、喜ばれていることを感じた。（一般）
- ・説明が不十分だったので全員がまんべんなく話せるようになっていて欲しかった。（本学卒業生）
- ・ボランティアに行った時の体験談を聞いたかった。（本学学生）
- ・ガレキが無くなっても灯籠流しなどのイベントを行って東日本復興はまだ続いていることが分かった。（本学学生）

アンケートには上記のような記述があったことから、特定の分野だけでなく多様なボランティアがあることを伝えることができ、ボランティアに対する興味、関心を持ってもらうことができたと考える。また、東日本大震災復興支援活動に関しては、活動初期からの復興支援の過程や、忘れられがちな東日本大震災を改めて伝えることができたと考える。一方で、展示を説明する学生スタッフ自身の知識や経験の不足があることが分かった。

4. 学んだこと・今後の課題

前日準備では、展示会場の配置図を用意したため、どこに何を配置するのかが全員に周知しやすく分かりやすかった。

展示に関しては、一部昨年度のものをリメイクし活用することで展示物を作成する時間が短縮できたが、どのように加筆修正するのか、色ぬりや写真を追加して見やすい展示物にするのかを的確に指示できず、学生スタッフの中で戸惑いが見られた。ML、LINE を定期的に回すようにする以外に、いつまでにだれが何をするのか、作業手順やスケジュールを可視化できる

よう張り紙をするなど、全体に情報共有する必要があった。しかしながら、企画メンバー以外の学生スタッフが積極的に作業を探して協力する姿が多く見られ、学生スタッフが協力して組織力・団結力が向上したのはよかった。

模擬店に関しては、1日目に全体でしっかりと振り返りを行って改善点等を出し合い2日目に活かすことができた。今後の課題としては、模擬店においても本企画の趣旨・目的を達成できるような工夫を加えることである。

全員で取り組む龍谷祭のような企画では、特に段取りが重要なため、企画メンバーの計画と、全員への情報伝達をしっかりとやることが今後の課題である。

台風の影響で2日目の展示時間が大幅に短縮されたのは非常に残念だったが、代わりに11月27日（月）から12月8日（金）の2週間、学生交流会館のエキシビションで龍谷祭展示の一部を展示し、広報することができたのは良かった。

5. 経 費

消耗品費（模造紙、インクなど） 9,921円

〈報告者：美濃 優磨〉



事業名	龍大生・教職員のボランティア意識調査 in 瀬田（新規企画）
日時	2017年12月4日（月）～12月18日（月）
場所	瀬田キャンパス内
参加人数	総回答者数 483名（紙媒体：414名、Web：69名） 学生：社会学部 216名、理工学部 133名、農学部 87名 職員：事務職員 18名、教育職員 29名
企画メンバー （学生スタッフ）	石田進登（理工2） 二木亮英（社会1） 正中菜帆（社会1）

1. 経緯・目的

瀬田キャンパスの学生スタッフは、NPO や地域団体等からの協力依頼に応じるなど地域課題に目を向けた学生企画を企画立案し、龍大生・教職員の方々にボランティア募集及び啓発活動を行い、ボランティアを募集している。しかし、あまりボランティア参加に繋がっていない現状がある。そこで瀬田キャンパスの龍大生、教職員は、どのようなボランティアを求めているのか、また、私たちが企画するボランティアも、学生のニーズに合っているのかを知るために瀬田キャンパスの龍大生・教職員を対象にボランティア意識調査を実施したいと考えた。この調査により実態を把握し、調査結果から導ける仮説を学生スタッフで考える。そして、2018年度は、ニーズを満たすように学生企画や班係活動を行い、結果的に瀬田キャンパスの龍大生・教職員のボランティア参加に繋げたい。なお、今回のアンケート調査の取得情報には、十分注意を払い、個人情報管理する。

2. 企画概要

(1) アンケート回収について

紙媒体アンケート目標回答数：500名

Web アンケート目標回答数：300名

合計目標回答数 →800名

（瀬田の学生 約6,000名の13%）

〈参考〉

活動報告書によると2016年度 573名・2015年度 417名（重複あり）の学生が瀬田のボランティア・NPO 活動センターへ来室している。

(2) 回収活動

〈学生と教職員〉

- ・WEB アンケートのQRコードを拡大し、提示板や看板等で読み取り回答していただいた。
- ・学生スタッフの口コミで広報し回答していただいた。
- ・食堂前に12月4日（月）5日（火）にバインダー

を学生スタッフが持ち、回答していただいた。

- ・12月6日（水）7日（木）のLet's ボランティア係が企画したボラセン喫茶へ来られた方にアンケートに回答していただいた。

〈一般学生〉

授業前広報：12月12日（火）3限「流体力学」

12月18日（月）4限「児童福祉論Ⅱ」

〈事務職員〉

瀬田キャンパスの各課にQRコードがついた紙媒体のアンケートを持っていき、協力依頼をした。後日アンケートを回収した。

〈教育職員〉

講師控室へ行き、すべてのメールBOXにアンケートを投函し、回収ボックスを設置した。その場に居られた先生には対面で説明し回答していただいた。



3. 参加者の声や得られた効果など

2017年度の春合宿（3月7日～8日）でワークショップをし、意識調査結果をもとにして解決策となる企画を立案した。以下は、ワークショップで出た企画案の一例である。

- ・「First Step～ボランティアへの初めの1歩をふみだそう～」
→ボランティアに関心のある学生に対し、学校帰りなどに参加できる短時間の活動のボランティアに、学生スタッフと一緒に参加する。活動先は子ども分野等、学生が興味関心を持っているところを選定する。
- ・「Do you know bamboo?」

→環境分野に興味のある学生が多い。放置竹林の現状を知ってもらおうと同時に竹の魅力にも触れ、竹の可能性に気づいてもらうイベントを行う。交流会、伐採や竹細工などの体験活動、事後学習会の3部構成で実施する。また、ワークショップ終了後に実施したアンケートでは、学生スタッフのほとんどが調査を行う重要性を感じたと回答した。以下は、そのワークを通して得た学生スタッフの意見である。

- ・ニーズ調査のデータを基に考えることができたので、一人ひとりが根拠ある課題を発見し、改善案をスムーズに出すことができた。
- ・部活などで忙しく、あまり時間が取れない学生を対象とする企画を考えた。
- ・調査データから、友達同士の口コミで広まると学生企画へ誘いやすくなると分かった。
- ・調査データがあることで、企画立案の際に学生スタッフやコーディネーターの方々の意見だけでなく客観的な意見を踏まえることができ、ターゲットとなる学生や教職員の方々へ効果的にボランティアやボランティア・NPO活動センターの情報を伝えることができる。

4. 意識調査の今後の課題

今後の課題として2点挙げられる。

1点目は、アンケートの回収方法である。どのようにアンケートを回収するのかを考えていなかったため、回答者に偏りができてしまった。今後は、幅広い層の学生・教職員から協力を得られるように回収方法や調査方法を検討していきたい。

2点目は、回答者にどのようにアンケート結果を還元していくのかを考えていなかった点である。集計方法や分析方法を含め、アンケートで得た結果をどのように還元し、活動に活かすのかを考えていきたい。これについては、瀬田キャンパスの学生スタッフ全体の課題とする。

以上の2点を踏まえて、アンケート内容や回収方法などに変更を加えながら、アンケート調査を今後も続け、結果を学生企画に活かしていきたい。

5. 経 費

消耗品 2,761円

〈報告者：石田 進登〉

事業名	STAR (Save The Animal from Ryukoku) プレゼンツ step 2・3 共生 ～動物にとっては強制？ 人間にとっては共生？～ (継続企画2年目)
日時 場所	step 2 考えてみよう！ 2017年11月29日（水）10時45分～12時45分：和顔館 B105 step 3 体験しよう！ ①動物愛護団体エンジェルズ ボランティア（滋賀県高島市今津町酒波1186-2） 2017年12月 3日（日）10時30分～16時00分 ②京都動物愛護センター 見学（京都市南区上鳥羽仏現寺町11） 2017年12月 7日（木）13時30分～15時00分
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	step 2 25名 step 3 動物愛護団体エンジェルズ（6名） 京都動物愛護センター（5名）
企画メンバー (学生スタッフ)	永翁ふみな（文学4） 藤原 純（文学3） 玉川隆明（文学2） 土橋茉奈（文学2） 中野優太（文学2） 吉田 響（文学2） 桑原田海（法学2） 佐々木大悟（政策1） 樋口大輝（政策1） 松田侑子（国際1）

1. 経緯・目的

昨年度、動物の殺処分が日本で行われていることを知ってもらうことを目的として写真展の企画を行った。（step1）フォトジャーナリスト

の児玉小枝氏による写真と、動物愛護団体エンジェルズで保護されている動物の写真を用い、救われない命と救われる命があることを伝えた。このような動物問題は多く存在している。

自分には関係のない問題と思っている人もいるだろうが、気づかないうちに私たちは動物の命に深く関わって生きている。そのため命を大切にしてもらうためには、「共生」とは何か、どう生きることなのかを問い直す必要があると感じた。

昨年の写真展はこの問題を知ってもらうための手段だった。次のステップとして、動物の命に関わる仕事をしている方の話をお聞きし、参加者と「共生」について話し合い、多種多様な考え方があることをお互いに受け止めあう機会を設け、自分に何ができるのか考えてもらうきっかけにする。またその次のステップとして、現場に触れることによりボランティアへの興味・関心を高める。



2. 概要

step 2：考えてみよう！

「共生」について深く話し合うために、講師として京都動物愛護センター職員である河野誠氏に「人と動物との共生」をテーマにお話をいただいた。そのあとに5～6名のグループに分かれ、「殺処分は仕方ないことなのか」「今、共生できているか」などのテーマをもとに考え、話し合う。



step 3：体験してみよう！

座談会での興味・関心を行動にうつす一歩とするために実施。

①動物愛護団体エンジェルズで、職員の話聞いた後、ボランティアを行う。

②京都動物愛護センターへ行き、職員の話聞いた後、センター見学を行う。

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・多様な価値観に触れ合い、普段は深く考えない「共生」について考えることができた。動物を好きか嫌いかは関係無く、向き合っていかなければならない社会課題だと思った。
- ・殺処分の現状、他団体の活動や関連する法律についてもっと知りたい。また、聞いた話や訪問した団体について周りに広めることやボランティアに参加することなど、小さなことでも自分にできることをコツコツ継続することが大切だと知った。
- ・これまであまり知らなかった動物愛護施設のことを知ることができてよかった。自分の中で共生を意識していきたいと思った。
- ・step 2、3を短い間隔で開催できたので、現場をみることで、聞いた話をより深く考えられたと思う。
- ・広報を企画メンバー全員で分担したのでスムーズに広い周知ができた。
- ・多くの広報手段（Twitter・三角柱・たて看・ビラ配り・学内放送・授業内広報）を用いて広報したのでこの企画 STAR について多くの方に知ってもらえた。

4. 反省点

- ・準備に関して、一人一人の役割分担に差があったにもかかわらず、自分の役割に収まってしまう、他のメンバーのサポートができていなかった。
- ・それぞれが何をどこまでできているかの情報の共有不足があった。
- ・スタッフミーティングで、座談会に向けて勉強会をしたのだが、座談会で話される内容を事前に打ち合わせしておき、その内容に合わせた中身にするべきだった。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

step 2：考えてみよう！

河野さんをお招きして動物問題の現状に触れ、動物と共生していくにはどうしたら良いか、今自分に出来ることは何か考えることができた。また、動物問題について深く関心を持つこ

とが出来た。

step 3: 体験してみよう！

実際に動物愛護団体エンジェルズと動物愛護センターに行き、作業のお手伝いや施設を見学することで動物達の「今」を肌で感じる事が出来た。見学、体験を通じて団体や職員さんの大変さを知ることが出来た。

(2) 今後の課題

〈企画準備〉

- ・いろいろな考えのある繊細な問題であるため、さまざまな方のアドバイスを聞いて準備を進めたため、内容の変更、修正を何度もする必要があった。企画を立てる前にそういった準備はしておく必要があったと思う。
- ・準備がどこまで出来ているのかを企画メンバーのラインやミーティングでしっかり共有すべきだった。
- ・協力いただいた団体と日程調整したのだが、平日開催はやはり学生が参加しづらく、参加しやすい日程調整が困難だった。

〈団体との調整〉

- ・事務連絡はメールでできるが、急ぎの場合は電話で問い合わせる必要がある。
- ・直接顔を合わせて打ち合わせすることは早い段階ですべきである。また、大学に来ていただく場合、広い構内は迷いやすいので注意が必要だった。

〈企画メンバー内の連携〉

- ・情報共有のために、メンバーがラインで連絡したときには、確認した旨の反応をすることが大切だと思う。
- ・一人ひとりの仕事量に差があったため、負担を感じるメンバーがでてしまった。

6. 経 費

学生スタッフ交通費	5,900円
消耗品（インクなど）	4,619円
合 計	10,519円

〈報告者：藤原 純〉

事業名	生きるぼくら～ボランティアから共生を見つめる～（新規企画）
日時	2018年1月11日（木）～3月23日（金）
場所	深草キャンパス和顔館 B109教室 その他
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	講演会参加者41名 ボランティア体験17名 ふりかえり座談会7名
企画メンバー（学生スタッフ）	新川貴大（法学4） 江上春奈（経営3） 日野萌絵子（法学3） 西山大樹（政策3） 玉川隆明（文学2） 桑原田海（法学2） 富上弥生（政策2） 木村太翼（文学1）

1. 経緯・目的

本企画は、私たちがボランティア活動を通して、実際に自閉症や知的障がいのある方々と関わっていく中で感じた「障がいのある人とそうでない人たちの間に存在すると思われる心の壁を無くし、障がいのある人とその家族が笑顔で安心して過ごすことができる社会を創りたい」、「障がいのある人とそうでない人がお互い



の個性を認め合い、分かち合い、誰もが輝きながら生きていける社会を創りたい」という想いのもとに生まれた。

(1) 「考えよう、心のバリアフリー」

講演会&ワークショップによって「自閉症、発達障害児ボランティアサークル プラネット」の親御さんたちから共生への想い、ボランティアへの想いなどさまざまな声をお聞きする。また、学生スタッフが体験したボランティアを通して、自閉症、知的障がいのある方々と関わってきた中で学生が感じている想いも届ける。これにより、参加者の方々に少しでも福祉ボランティアへの関心、自閉症や知的障がいのある人たちへの関心を持ってもらうこと、関心を深めてもらうことを目的とする。本企画では、一方的に語

りかけるような従来の硬い雰囲気の講演会ではなく、来場者とプラネットの親御さん、企画メンバーがリラックスしてそれぞれの想いを素直に語り合えるような場にしたいと考えている。

(2) ボランティア体験ツアー

上記の講演会&ワークショップをきっかけとして実際にボランティアに参加していただき、自閉症や知的障がいのある人たちと関わってもらうことで、心のバリアフリーを実現するきっかけとする。

2. 概 要

2017年5月下旬から企画メンバーで話し合いを始めた。講演会への参加をメインに広報を12月から行った。方法はチラシ、立て看板、SNS、三角柱、授業前広報など。申し込みはGoogleフォームを用い、当日まではメールで連絡を取っていた。定員30名としていたが、学生スタッフ・一般学生共に多くの参加希望があったため、オーバーしたが希望者には全員来ていただいた。講演会当日は41名の参加があった。

(1) 「考えよう、心のバリアフリー」

(講演会と座談会) 参加人数41名

- ・「ボランティアサークル プラネット」メンバーの母である堀田さんの講演。
- ・学生スタッフの桑原田さんの発表。
- ・小グループに分かれて講演会の感想を共有。
- ・複数のグループを一緒にして、親御さんを交えての座談会。
- ・ボランティア紹介と体験希望者の募集、講演会のアンケートを実施。

(2) ボランティア体験ツアー

企画メンバーにご縁のある3カ所のボランティア先へ体験に行く。事前アンケートで希望者のみの参加となり、合計5回のボランティアに17名が参加した。

- ・れいんぼう タイムケア事業
(2018年2月10日、24日)
- ・ボランティアサークル プラネット
(2018年2月18日、3月11日)
- ・MMK サークル
(2018年3月17日)

(3) ふりかえり座談会 参加人数7名

ボランティア参加者に任意で参加を呼び掛けて実施。企画メンバーの他、学生スタッフ1名、一般学生1名の合計7名での開催となった。約2

時間のふりかえりで、ボランティアに行った感想や障がいのある方に対するイメージなどを話し合った。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声 (抜粋)

○「考えよう、心のバリアフリー」

- ・自閉症のお子さんをもつ親御さんの話を聞く機会はあまり無いので生のお話を聞くことができてよかったです。また、ボランティアに実際に関わっていらっしゃる学生さんのお話を聞くことで、ボランティアのイメージがわきやすかったです。
- ・今まで自分が持っていた障がいをもつ方々に対するマイナスイメージがガラッと変わった。
- ・実際にプラネットの方やボランティアに参加された方々の話を直接聞いて、自分の中でボランティアや障がいを持つ人と関わることへのイメージに変化があった。

○「ボランティアツアー」

- ・買い物支援のボランティアだったのだが、友達と買い物に行くみたいで、ボランティアだけど自分が想像していたようなボランティアとは全く違っていました。
- ・初めてのボランティアで緊張しましたが、やってみると気楽な感じで楽しめました。障がい者だからとか、そういったことをあまり考えずに、人として関わることのできるボランティアだと感じました。
- ・活動先の障がいのあるメンバーの方々からお話を聞いて、とても親近感を感じました。

(2) 得られた効果

- ・準備段階から企画メンバー同士が企画について深く考え、話し合えたことで参加者により多くのことを伝えることができた。
- ・講演会の満足度の平均は91.75%と高く、実際に障がい者の親御さんの講演を聞くことで、より深く想いが伝わったと思う。
- ・初めてボランティアに行った学生から「楽しかった、また来たい」などの声が上がっており、ボランティアに対する興味、関心を高めることができた。

4. 反省点

座談会の準備や企画の進め方、講演者との事務連絡、調整など、詳細の検討がぎりぎりであっ

た。新規企画ということもあり、中身を決める話し合いが長期間になり実施時期が遅くなった。また、企画メンバー間の情報の共有不足や作業の偏りなどが多く見られたことが反省点としてあげられる。

5. 学んだこと・今後の課題

今回、講演会、座談会、ボランティア体験と3段階に分けて企画したことが「障がい」を身近に感じてもらう上で、重要であったと考える。

「ボランティアサークルプラネット」のメンバーの母である堀田さんのお話を聞き、今まで障がいのある方と関わってこなかった学生も、生き方や考え方に触れる貴重な機会を得ることができた。さらに、何度もボランティアに行っている学生スタッフの声を直接届けることで、学生目線の考えを知ってもらい、より身近に感じてもらうことができたと思う。

ボランティア体験ツアーの参加者は、戸惑いながらも楽しんで活動し、今後も障がい分野のボランティアを続けたいと感想をのべている。話を聞くだけでなく、実際に障がいのある方や支えている方に関わることで、障がいのある方の生活や考え方、関わり方を学ぶ経験になったと思う。このように今回の企画が、今まで関わってこなかった学生が、「障がい」に対する知識を深め、共生社会を目指すために何をするべきか

考えてもらうきっかけになれたのではと考える。

講演会への参加者が41名と多くの方に集まってもらえたのは、授業前広報の回数を増やし広報に力を入れた結果である。龍谷大学のボランティア人口増加のために、今後学生スタッフ企画を行う際はもっと授業内広報を率先して行うことは有効であると考ええる。

今後の課題としてあげられるのは、これから共生社会を目指すために学生スタッフとしてどのような活動ができるか考え続ける必要があるということだ。1度きりの企画として終わるのではなく、これからも多くの学生スタッフを巻き込んで考えていかなければならない。今回、企画を実施する上で、学生スタッフの障がいや福祉についての知識がまだまだ足りていないと感じた。「分野が違うからわからない」で止まるのではなく、より良いボランティアコーディネートのためにも、もっと社会問題に関心を向けて勉強を続けていきたい。

6. 経 費

消耗品	3,929円
(画用紙、ペン、バインダー、カード、クリアファイルなど)	

〈報告者：桑原田 海〉

事業名		サークル活動・ボランティア活動情報交換会およびボランティア活動支援	
サークル情報交換会	キャンパス	深草キャンパス	瀬田キャンパス
	実施日時・参加人数	2017年 4月26日（水）4団体 6名 2017年 7月 7日（金）5団体 8名 2017年 9月26日（火）4団体 8名 2017年11月16日（木）5団体12名 2018年 1月15日（月）6団体 8名	2017年 4月26日（水）4団体6名 2017年 7月 7日（金）3団体5名 2017年 9月26日（火）3団体4名 2017年11月16日（木）4団体6名 2018年 1月15日（月）3団体5名
		いずれも 12時30分～13時00分	いずれも 12時50分～13時20分
	場 所	ボランティア・NPO 活動センター	ボランティア・NPO 活動センター
	登録団体	ジャズ研究会 B.W. broadway musical 学術文化局マンドリンオーケストラ 学術文化局交響楽団 京炎そでふれ！輪舞曲 学術文化局ボランティアサークル 手話サークル 国際ボランティア学生協会（深草） 学術文化局龍吟会 応援リーダー部	アカペラサークル MOUSA アコースティックギターサークル音×音 よさこいサークル華舞龍 Sept Couleur 社会福祉研究会（S.W.A.P） 手話サークル Do Activity Yourself マジック&ジャグリングサークル Mist ワークショップビハラー 国際ボランティア学生協会（瀬田） 沖縄三線うみいろ
		計10団体	計10団体
活動ボランティア支援	依頼件数	89件	
	調整件数	102件	
	成立件数	48件	
実施主体		ボランティア・NPO 活動センター	

1. 経緯・目的

学内のサークルとの関係をつくり、ボランティア活動を促進することを目的とし、学内サークルとの連携強化、学内でのセンターの認知度向上、サークルの地域活動のサポート等を目指し、サークル活動・ボランティア活動情報交換会の実施、および、サークルへのボランティア活動支援を行っています。

2. 概要

(1) サークル登録制度

学内のサークル（宗教局、放送局、学術文化局、体育局、各種委員会や一般同好会）のうちボランティア活動への参加、情報提供を希望するサークルが登録を行っています。（ボランティア活動以外のサークルも登録対象）

(2) サークル活動・ボランティア活動情報交換会

年間5回、深草、瀬田両キャンパスで実施し、サークル同士のネットワークづくりやサークルの活動に役立つ情報提供を行っています。具体的には、センターの活動紹介、サークルの特技を活かした地域でのボランティア活動について

説明、助成金の情報提供等を行い、新規登録サークルの呼びかけも行いました。

(3) サークルへのボランティア活動支援

自治会・子ども会・老人会等の住民組織、社会福祉施設等、地域の団体からのボランティア活動、ボランティア出演の依頼に対し、各サークルへのボランティアコーディネートを行いました。

3. 参加者の声・得られた効果など

サークルを紹介した地域の団体からは、「学生の活躍でイベントが盛り上がった」「子どもたちがとても喜んでくれた。ぜひまた来てほしい」等の声が挙がり、学生の活動が地域交流、地域貢献につながっていることがうかがえました。

一方、ボランティア出演したサークルの学生からは「得意なことをやって喜んでもらえるのはうれしい」「来てくれてうれしいと涙を流されてうれしかった」等の感想が寄せられました。

学生スタッフの中の、サークルと掛け持ちして活動している学生が、サークル内でのボランティア啓発を自主的に始めました。地域の中でニーズが多いことを知って、「何かできるか

も！」とサークル内部に働きかけ始めたのは大きな成果です。全国的に急増している子ども食堂からの依頼が増えている中、サークルの学生たちの活躍の場をコーディネートしようとする動きが見られます。

4. コーディネーター所感

今年度も登録サークルが、それぞれの活動の特徴を活かし、地域からの出演依頼に応じて活動しました。子ども食堂や放課後等デイサービスなどから「とても良かったからもう1回近いうちに来てほしい」という依頼や、口コミでの依頼が増えたのが今年の特徴でした。

ボランティア出演は、日頃の成果を幅広い世代に伝える場となり、サークル活動の幅を広げていると感じます。

あるサークルは、発表する場を多く経験したことで自信をつけ、「もっと発表の場を増やしたい」と積極的に動き始め、新ジャンル（障害者デイサービス、障害児学童保育、コミュニティカフェ等）での発表を次々に実現していきました。

活動実施後は、双方へヒアリングを行い、SNSで体験談や感想を発信しました。

情報交換会は、年5回、昼休みのほんの30分間で、十分な情報交換ができていたとはいえませんが、他のサークルがどんな活動をしているのか、コラボできることはないか等、話し合っています。

今後も、情報交換会がサークル同士の交流ができる魅力的な場となるよう運営するとともに、サークルのボランティア活動の場をコーディネートし、応援していきたいと考えています。サークルへの登録の呼びかけ、“学内でのサークル発掘”も課題です。

〈報告者：古澤 登美代

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

